

# テレビ・アーカイブ論の盲点——1960年代～70年代初頭における日本のテレビ研究史・再考（2016）

## The Problem of Television Archive Theory in Japan:Reconsideration of Japanese Television Studies in the 1960s to the early 1970s (2016)

松山 秀明<sup>1</sup>

Hideaki MATSUYAMA

<sup>1</sup> 東京大学大学院情報学環 The University of Tokyo Interfaculty Initiative in Information Studies

**要旨**・・・本稿は、日本におけるテレビ研究の歴史を概括し、テレビ・アーカイブの分析枠組を検討するものである。とくに1960年代から70年代初頭の日本のテレビ研究（放送産業論と放送芸術論）に注目することで、今日のテレビ・アーカイブ論にとって有益な視座を見いだした。

**キーワード** テレビ研究, 研究史, アーカイブ論, 放送産業論, 放送芸術論

### 1. はじめに

2000年代後半以降、日本のテレビ研究は「アーカイブ論」全盛の時代を迎えている。2010年より、NHK番組アーカイブ学術利用トライアル研究の開始とともにその成果が各方面で発表されるようになり、2015年には『社会学評論』が「映像アーカイブズを利用した質的調査の探求」を特集した。テレビ・アーカイブ論隆盛の背景には、放送局による番組アーカイブの整備・公開があり、いま徐々に研究者たちによってテレビ番組の歴史が立体化されつつある。

しかし、この近年の学術的潮流を、広くテレビ研究史の文脈から眺めてみたとき、ある注意点が見えてくる。それは番組をコンテンツとみなし、「テレビは〇〇をどう描いてきたか」という単なる表象研究の再生産におちいってしまうことである。「〇〇」にはさまざまな事象が入るだろう。戦争、農村、家族、公害、格差、災害、アジア……。さまざまな事象を当てはめながら、テレビ番組のなかの「現実」を解明していく重要性は否定しない。むしろ、こうした多様な研究の蓄積が、テレビ番組の歴史を立体化する。

ただ、このような思考にこだわっていると、まるでXの関数に無限に値を代入するように、いつまでも終わりのない解を求めつづけることになりかねない。近年のテレビ・アーカイブ論は、ともすれば自らのテーマに沿った番組収集と内容記述に満足してしまう危険に満ちているのだ。すでに伊藤守（2015）がミシェル・フーコーの言説分析をもとに検討しているように、これからは単なる「表象研究」ではない新しいテレビ・アーカイブ論の方法論の開拓が急務である。

そこで本稿では、テレビ・アーカイブ論の隆盛を受けて、伊藤とは異なる立場からテレビ番組群の分析枠組を検討してみた。具体的には、「日本のテレビ研究史」を概括し、それらを再考することで、近年のテレビ・アーカイブ論の盲点を明らかにすることを目的とする。これまで日本のテレビ研究史を整理し、分類し、今後の研究に活かそうとする視点は希薄だったと言わざるを得ない。いま一度日本のテレビ研究の「方法論の歴史」を見なおすことは、テレビ・アーカイブへの向き合い方を知るヒントが隠されているに違いない。

### 2. 研究の対象／方法

日本のテレビ研究史を俯瞰するため、掲載紙の文献調査を行なった。対象としたのは、テレビ研究を著した書籍のほかにも、1950年代以降の『新聞学評論』や各種放送雑誌（『放送朝日』、『CBCレポート』、『放送文化』、『YTV REPORT』など）、『放送学研究』、『文研月報』、『東京大学新聞研究所紀要』、『キネマ旬報』などに掲載されたテレビ論／テレビ研究である。研究者や論者の立ち位置、論考の相互関係に注意しつつ、日本のテレビ研究の言説編成を辿った。

その結果、とくに1960年代～70年代初頭のテレビ研究に注目することにした。と言うのも、この時期に、途絶えてしまった

日本のテレビ研究の可能性の多くを見いだすことができるからである。1973年6月1日、日本新聞学会春季研究発表会・シンポジウム「テレビジョンの20年、テレビ研究の20年」において、岡部慶三はすでに「テレビ研究離れ」を指摘している。これは1970年代初頭におけるテレビ研究のいったんの到達点を示す一方で、この発言以前のテレビ研究の多様性や豊饒性を示すものでもあった。事実、日本のテレビ研究史を概括してみると、1960年代～70年代初頭の研究の鋭さに気づかされる。したがって、本稿では、とくに1960年代～70年代初頭のテレビ研究を再考することで、近年のテレビ・アーカイブ論の参照軸となる視角を見いだすことにした。

### 3. 日本のテレビ研究史の「一般的な理解」

文献を渉猟した結果、日本のテレビ研究史は5つの領域に分類することができた。(1)戦前のラジオ研究から続くマス・コミュニケーションの機能論、(2)1960年代の放送産業論・情報産業論、(3)1960年代～70年代初頭の放送芸術論、(4)1980年代頃以降のカルチュラル・スタディーズの影響を受けたオーディエンス・エスノグラフィー、(5)2000年代後半以降のテレビ・アーカイブ論である。

よく言われるように日本のテレビ研究は、テレビジョンをマス・コミュニケーションの機能的側面から論じる研究が大部分を占めてきた。とくにテレビジョンの「受容過程」に関する研究が主流だったことに注意しなければならない。それは多くの研究者が指摘するように、日本のテレビ研究が、戦後アメリカからのマス・コミュニケーション研究の圧倒的な支配下にあり、その影響で、テレビの受け手に関する社会心理学的な研究を無自覚に蓄積していったためであった。この立場ではテレビ・メディアを透明な媒体とみなし、受け手がどのような「反応」を示し、受け手にどのような「効果」を与えることができるのかというマス・コミュニケーションとしての機能的側面に関心を示すものであった。

なかでも東京大学新聞研究所とNHK放送文化研究所という二つの組織は、実証的なデータを提示することで、テレビジョンの「機能」を統計的に論じる流れをつくりあげてきた。たとえば東京大学新聞研究所では「マス・メディアとしてのテレビ——調査報告」(1957)、「テレビと“孤独な群衆”」(1958)、「東京都民の生活時間と生活調査」(1962)、「石垣島におけるテレビ調査」(1968)といった調査研究群、一方、NHK放送文化研究所では、世界4大調査の一つとして評価された「静岡調査」(1957,59)、今日まで続く「国民生活時間調査」(1960)などの調査研究がある。

こうしたマス・コミュニケーションの「機能的側面」から論じる立場を否定するかたちで出てきたのが、カルチュラル・スタディーズに影響を受けたオーディエンス・エスノグラフィーであった。イギリスで勃興したカルチュラル・スタディーズは、1970年代から80年代にかけて全盛を迎え、その後、日本でも概念が積極的に輸入されて、テレビ研究に応用された。ここではテレビの送り手-受け手の単線性が否定され、テレビというメディアの日常的な営みのなかに潜む権力作用を暴くことが目的とされた。1970年代から80年代にかけ、主にイギリスで隆盛したカルチュラル・スタディーズが、ようやく、日本では1980年代後半から2000年代に受容されていくこととなった(伊藤守・藤田真文編 1999;小林直毅・毛利嘉孝編 2003)。

ただ日本では、海外理論の日本への適用としての側面が強く、主に批判的オーディエンス論として、デヴィット・モーレーやイエン・アング、ジョン・フィスクの書物が盛んに引用された。結果、日本におけるカルチュラル・スタディーズはオーディエンス・エスノグラフィの日本版として展開し、そこでの問題意識はイギリスの場合と同様に、「人びとが日常生活のなかでテレビ視聴という行為をとおしてどのような意味を紡ぎだしているのか」に焦点化されていた。テレビを社会的な空間において理解することの系譜を、日本的文脈のなかに積極的に導入していったのである。

以上に見てきた、マス・コミュニケーションの機能論から、カルチュラル・スタディーズに影響を受けたオーディエンス論へと至る流れが、日本におけるテレビ研究史の「一般的な理解」である。しかし、こうした大きな研究史のなかで、あまり顧みられないことのない忘却された研究群がある。それが1960年代～70年代初頭の「放送産業論・情報産業論」および「放送芸術論」であった。

### 4. 忘却されたテレビ研究群——1960年代～70年代初頭

#### (1) 放送産業論/情報産業論

日本のテレビ研究は「受容過程」に着目したものばかりではなかった。数は少ないながらも、主に1960年代から1970年代にかけて、テレビの制度や産業を研究する系譜が存在した。これは先の「受け手」に対して「送り手」に主眼をおいたものであり、テレビジョンの生産や伝達過程について問おうとするものであった。この「送り手」への議論が立ちあがった背景には「これまでのマス・コミ研究は、ほとんど効果論、機能研究を中心としたものであって送り手の研究は立ちおくりていまし

た」（高木教典 1963：11）という、高木のような研究者たちの反省があったからにはほかならない。このような伝達過程研究の貧困の原因は、「一つには送り手の構造の軽視と、二つには送り手の意識の軽視にあった」（稲葉三千男 1964：27）と言われ、さらに、研究者側からの送り手への「接近の困難さ」（井上宏 1975：6）も大きな要因として挙げられた。

その結果、1960年代から70年代に隆盛した放送産業論を整理してみれば、以下の6つの領域に分類することができるだろう。第一の領域は、放送法や放送制度について問うもの（瓜生忠夫 1965；荘宏 1963）。第二の領域は、テレビ局の独占的な産業構造を問うもの（高木教典 1963）。第三の領域は、メディア資本の融合関係（＝資本関係）を問うもの（高木教典 1965）。第四の領域は、NHKと民間放送の併存関係を問うもの。第五の領域は、番組の編成を問うもの（後藤和彦 1967；日本放送協会総合放送文化研究所 1976）。第六の領域は、テレビジョンの組織的集団について問うもの（志賀信夫 1977）である。もちろん、これら6つの研究領域は排他的でなく、分類はあくまでも便宜的なものにすぎないが、これらは「電波の希少性」から派生した日本独自の特殊なテレビ産業・組織形態を把握することが、共通の目的としてあった。

こうした1960年代から70年代の日本の放送産業論のなかでも特異な存在であったのが、梅棹忠夫だろう。1960年代前半、大阪市立大学時代にテレビに関する決定的な論考を残した梅棹は、放送産業を実業に対する虚業として、情報産業の典型例とみなし、農業の時代、工業の時代に次ぐ、精神産業の時代の到来を予言した（梅棹忠夫 1963）。実にアルビン・トフラーが『第三の波』を発表する20年前のことである。この議論の背景には、「放送会社というものが、物質あるいはエネルギーという点ではなにも生産していないのに、どうして大会社として存立できるのか」（梅棹忠夫 1991：343）という梅棹独自の問いがあった。こうした流れを受けて、1960年代後半から1970年代にかけて放送の未来に関する論考が盛んになり、テレビ研究においても、各局でそれぞれ放送の未来論をまとめたものが次々と刊行されていったのである（日本放送協会総合放送文化研究所編 1966；TBS調査部 1970；YTV情報産業研究グループ編 1975）。

## (2) 放送芸術論

一方、受け手から送り手への脱皮を試みる1960年代～70年代の日本のテレビ研究の展開のなかで、両者をつなぐ「メッセージ内容」、つまり「テレビ映像」に焦点をあてた系譜もあった。これらはテレビジョン固有の映像特性について論じ、そのテレビ的な原理を探求していこうとする議論の系譜である。テレビ映像に関する研究は、その内容と時代によって3つに区別することができる。第一に、放送を美学ないし芸術学からとらえる映像論（1960年代～1970年代前半）。第二に、初期のテレビ制作者たちによる映像論（1950年代後半～1960年代）。第三に、放送を構造的分析ないし記号学からとらえる映像論（1970年代後半～2000年代）である。とくに今日顧みられることの少ないのは、第一の、放送を美学ないし芸術学からとらえる映像論である。

テレビを芸術として捉える先鞭をつけたのは佐々木基一である。佐々木は著書『テレビ芸術論』（1959）のなかで、大衆芸術の手段としてのテレビの可能性を追究した。佐々木によれば、テレビ芸術の成立を考えるうえで、2つのテレビ的特性を考慮する必要があり、第一に「再現機能の独自性」、第二に「鑑賞方法の特色」である（佐々木基一 1959）。とくに佐々木は、日常生活の利便的芸術にテレビ映像の本質を読み解いた。これは当時、生放送全盛の時代にあつて、テレビの「同時性」が注目されたためであったからにはほかならない。当時のテレビ映像研究では「テレビのこの現在進行形＝同時性こそ、テレビを、他のあらゆる芸術と区別する第一の点である」（岸田功 1960：23）という主張が主流だった。このような言説はとくに映画の表現形式と比較しつつ、テレビ映像を一回性の媒体特性として論じていくものであった。

この流れが、1960年代に美学によるテレビ映像論へと展開していくことになる。ここで主導的な役割を果たしたのが、山本透、浅沼圭司、木幡順三らであった。彼らの研究は1966年に「放送芸術の特性に関する研究会」を発足し、日本映像学会の創立（1974年）の大きな原動力となっていく。例えば山本透は、放送に独自の美的価値を認め、「自律的な芸術の一ジャンル」としての放送芸術の確立を主張する（山本透 1962, 1967）。山本によれば、放送は既成芸術には見られない独自のものをもっている。いままで芸術は「日常性」を遮断することで成立してきたが、放送は日常性を吸収した「新芸術」となる可能性を秘め、日常性と芸術性の矛盾構造の解明につながると山本は説いた。一方、浅沼圭司は、映画理論を援用しながら、映像の伝達性／模造性について論じていく（浅沼圭司 1968, 1969, 1971, 1972）。浅沼は、映像の意味性は純粹な記号ではなく、模像としての性格にあり、映像研究は意味作用よりも再現作用について語らなければならないと主張する。この視点で見れば、テレビジョンとは「映像という記号と電波という搬送媒体の結びつき」である（浅沼圭司 1995）。ゆえに、テレビ映像は電波の搬送によって、映画にはない「絶対的偏在性」を獲得する。

以上の山本と浅沼による美学からテレビ映像をとらえる立場はしばしば抽象的思弁に陥るものではあったが、今日議論されることの少ないテレビと芸術、映像と技術を扱う、忘却された研究群であった。

## 5. 新たなテレビ・アーカイブ論へ

以上、1960年代～70年代の放送産業論と放送芸術論を再考したとき、近年のテレビ・アーカイブ論の盲点が見えてくる。第一の盲点は、番組背後の「産業・組織」が不可視化されていることである。過去の番組を視るとき、NHKか民放かという区別だけでなく、いかなるテレビ・ネットワークを経由して放送された番組か、いつの時間帯に放送され、裏の番組は何だったのか、当時の制作体制はどのようなもので、放送制度との関連はあるのかといった、かつて放送産業論で示された領域に自覚的になる必要があるだろう。第二の盲点は、番組映像が「電波による搬送」であることが不可視化されていることである。これは「同時性」というありきたりな概念で示されるべきものではなく、過去の番組はもっと各時代の放送技術との関連で論じられるべきである。そこに新芸術を見るか否かは別にして、生放送、VTR、カラー、衛星放送、ハイビジョン、デジタル放送といったテレビ技術史の変遷のなかで番組映像を捉えていく必要があるだろう。

こうして「テレビは〇〇をどう描いてきたか」という表象研究は、番組を産業・組織あるいは技術とともに考えることで、より深い議論が可能となる。1960年代から70年代のテレビ研究は、テレビ番組を単に表象から考えるのではなく、番組を産業や技術と結びつけながら「テレビとは何か」という根源に立ち返らせる、有益な視座を与えてくれる。

## 参考文献

- 浅沼圭司, 1968, 「模像と記号——『映像の意味的性格』 [I] 」『放送学研究』17:5-32.  
———, 1969, 「映像と記号——『映像の意味的性格』 [II] 」『放送学研究』20:5-30.  
———, 1971, 「単位記号と記号単位——『映像の意味的性格』 [III] 」『放送学研究』22:83-108.  
———, 1972, 「映像体系と意味的現実——『映像の意味的性格』 [IV] 」『放送学研究』24:127-155.  
———, 1995, 「精密科学から哲学へ——六〇年代以降の映像理論の展開と問題点」『マス・コミュニケーション研究』46:3-17.  
後藤和彦, 1967, 『放送編成・制作論』岩崎放送出版社.  
稲葉三千男, 1964, 「マス・コミュニケーションの伝達過程」『東京大学新聞研究所紀要』12:23-37.  
井上宏, 1975, 『現代テレビ放送論——〈送り手〉の思想』世界思想社.  
伊藤守, 2015, 「テレビ番組アーカイブを活用した映像研究の可能性——分析方法・手法の再検討に向けて」『社会学評論』65(4): 541-555.  
伊藤守・藤田真文編, 1999, 『テレビジョン・ポリフォニー——番組・視聴者分析の試み』世界思想社.  
岸田功, 1960, 「大衆性・真実性・芸術性」『文学』28(2):17-23.  
小林直毅・毛利嘉孝編, 2003, 『テレビはどう見られてきたのか——テレビ・オーディエンスのいる風景』せりか書房.  
日本放送協会総合放送文化研究所編, 1966, 『放送の未来像』日本放送出版協会.  
———, 1976, 『放送学研究——日本のテレビ編成』28.  
佐々木基一, 1959, 『テレビ芸術』パトリア書店.  
志賀信夫, 1977, 『人物による放送史——ヒット番組を創った人びと』源流社.  
荘宏, 1963, 『放送制度論のために』日本放送出版協会.  
高木教典, 1963, 「マス・メディア産業論と放送研究」『新聞学評論』13:10-14.  
———, 1965, 「日本のテレビ・ネットワーク——アメリカとの比較において」『東京大学新聞研究所紀要』13:33-59.  
TBS調査部, 1970, 『情報未来学序説』ブロンズ社.  
梅棹忠夫, 1963, 「情報産業論——きたるべき外胚葉産業時代の夜明け」『放送朝日』104:4-17.  
———, 1991, 『梅棹忠夫全集 第14巻——情報と文明』中央公論社.  
瓜生忠夫, 1965, 『放送産業——その日本における発展の特異性』法政大学出版局.  
山本透, 1962, 「放送芸術の美的体験構造」『放送学研究』3:5-37.  
———, 1967, 「テレビにおける『芸術判定』の問題」NHK総合放送文化研究所編『創立二十年記念論文集』日本放送出版協会, 605-627.  
YTV情報産業研究グループ編, 1975, 『日本の情報産業——大衆操作の生態学的研究』サイマル出版会.